

7 外来動物

本来生息していない所へ人間が持ちこんだり、荷物などにまぎれて侵入し、そこにすみつき繁殖を重ねている生物を移入種と呼びます。なかでも、外国からやってきたものを外来種と言います。身近なところにも、そうした外来動物が見られるようになってきました。外来動物は農作物への食害だけでなく、在来種にとって捕食やすみかの競合によって大きな脅威となり、さらには、寄生虫や感染症を持ちこむ場合もあります。

アライグマ：北米原産で成獣は5～10kg、タヌキより一回り大きな動物です。人間やサルと同じく5本指を器用に使い、物をつかんだり、握ったりできます。夜行性なので、日中に姿を見ることは稀ですが、特徴的な手足の痕跡からアライグマの生息が確認できます。田辺市では農作物への食害が増えており、2002年から捕獲をしています。



アライグマ

ハクビシン：東南アジア・台湾原産で成獣は4～5kg、からだは細長く40cmを超える長い尾が特徴です。日本国内には江戸時代に持ち込まれていたようです。樹上生活に適応しており、電線や雨樋さえも移動に利用します。県南部では2014年に白浜町内で初めて見つかри、田辺でも既に30頭以上確認されています。今後、生息数の増加、分布の拡大が心配されています。



ハクビシン

ミシシippアカミミガメ：北米原産で、頭部の側面にある赤い模様が特徴のカメです。ミドリガメの名前でペット用に販売されていました。全国的に野生化しており、その影響でイシガメやクサガメが激減しています。田辺でも川や池などで見かけるカメの大半は、このアカミミガメになってしまいました。



ミシシippアカミミガメ

アフリカツメガエル：名前のおお指先に爪のあるカエルで、ほとんど水中で過ごし、陸に上がることは稀です。

このカエルは、2007年に新庄町鳥ノ巣のため池で初めて見つかりました。鳥ノ巣では、いくつものため池で生息が確認されていますが、鳥ノ巣以外の場所ではまだ見つかっていません。ため池の水を抜いてこのカエルの駆除を試みたところ、本来いるはずのエビやカニ、水生昆虫が極めて乏しく、アフリカツメガエルがため池の在来種を食べ尽くしているようでした。



アフリカツメガエル

自然は長い年月を経て形成された生き物のつながりやバランスで成り立っています。外来生物は、そうしたつながりを持たず、バランスを壊してしまいます。長い歴史を共有している在来種が暮らす自然を守ったり、回復するには、外来生物を排除することが人間の大きな役目となっています。